

追悼文

有住直介先生を偲ぶ

有住直介元気象庁長官は、平成19年12月6日に、虚血性心疾患のために、さいたま赤十字病院でなくなりました。89歳でした。この年の年賀状に「名古屋市ののお寺に参詣しました」と書いておられたので、まだまだお元気だと思っておりましたのに、まことに残念なことです。

有住さんは、東京に生まれて東京で育ち、第一高等学校、東京帝国大学理学部物理学科を卒業するとすぐ中央気象台に入台されました。昭和17年のことでした。戦争のただなかであったために、昭和19年7月には召集されて船舶通信隊に入隊し、幹部候補生になりましたが、そこで終戦を迎えられました。

昭和21年4月に再び中央気象台に入台され、観測部高層課調査掛長になりました。そこで行った「垂直流の図式計算法とそれによる低気圧進路の予報」についての研究によって中央気象台長表彰を受けられました。昭和25年6月にはアメリカ合衆国に出張を命ぜられ、カリフォルニア大学ロサンゼルス校の気象学教室に一年間留学されました。帰国後、昭和26年11月から予報部予報課の予報官になりました。

昭和29年5月には気象学会の理事に選出されました。それまで気象学会の機関誌は「気象集誌」だけでしたが、気象学会も専門誌とともに一般誌も持ちたいという気運が高まり、「天気」の発行が始められたのですが、有住さんはその最初から編集担当の理事になられ、10年にもわたってこれを育て上げることに全力を尽くされました。

昭和39年4月に観測部高層課長になりました。丁度その頃は、昭和32年から33年にかけて行われた国際地球観測年を出発点とした国際協力による高層気象観測が盛んになりつつあったときでしたので、日本もそれに参加することになり、それに必要な気象観測ロケットの開発が有住さんを中心として行われました。このときは、東京大学のロケット開発チームの協力を得て鹿児島県の内之浦で気象ロケット MT-135の開発実験が行われましたが、有住さんは度々そこに出張して開発を推進されました。



この気象ロケット MT-135には米国も注目することになり、米国のアーカスロケットとの国際比較観測がバージニア州のワロップス島で行われることになりました。日本からは有住さんを団長とするチームが昭和42年3月に MT-135を持って現地へ行き、日米気象ロケットの比較観測が行われました。その結果などをもとにして MT-135の改良が進められました。

有住さんは、昭和44年度に予報部の業務課長を勤めたのち、昭和45年度からは総務部企画課長に就任されました。それまでこのポストは本省から事務官が来ておりましたが、吉武長官の方針によって、気象庁の計画の中心である企画課長は技官が勤めるべきものであるということで、有住さんが最初にこのポストにつかれたのでした。ここで有住さんは日本の静止気象衛星の基本計画を定め、実施への道をつけて行かれました。

有住さんは、昭和48年度には福岡管区気象台長、49～50年度には観測部長を歴任されてから、昭和51年4月に気象庁長官に就任されました。そして昭和52年7月には日本の最初の静止気象衛星ひまわりが打ち上げられ観測を開始しました。

このように有住さんは先見の明と実行力とによって気象業務の推進に大きな貢献をされました。

ここに謹んでご冥福をお祈りいたします。

(清水逸郎)